

# フィールド風

(現場)からの風

宮田守男

2月中旬開催された第72回国体冬季大会「ながの銀嶺国体」スキー競技会、最終日は雨に見舞われたが、白馬高校生ボランティア

の活躍や保育園・小学校生徒の懸命な応援、地域観光協会の温かいトン汁の振る舞いの情報が会場から全国に発信された。関わった多くの人の良き思い出になってほしい。白馬では、過去2回国体が開催されている。1回目は、昭和43

## 成績を競い合う大会であっても、多くの地域住民が参加する工夫の大切さを考えてみませんか

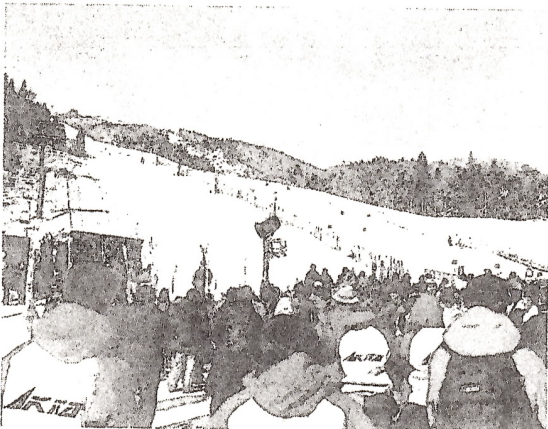
年開催の第23回「心をこめて迎えよう白馬国体」大会。ジャンプ台が雪印乳業株式会社から多額寄付で誕生した「白馬雪印ジャンプ」は世界一の規模。クロスカントリリー競技で長野県チー

ムの4走で出場した地元選手の和田光三さんに「入賞、入賞」と懸命に応援した興奮を今でも鮮明に記憶している。国体を開催するに当たり募集した村章の誕生や白馬を全国に発信したいとの村民一丸

の取り組みは、それ以後の発展に大きな意義を持った。2回目は、昭和62年開催の第42回「雪と氷に若さが光る」大会。雪不足で、連日地元民や自衛隊員3000人がコースに雪運び。大会

会場には、延べ1500台のダンブカーで約2万立方メートルの雪が運び込まれた。開会式は、森上グラウンド。仮設観覧席担当の長野県職員が、雪交じりの風が吹き付ける悪天候の中で対応した姿や、国旗入

加の経験が、長野オリンピックの招致の原動力になった。競技成績を競う大会だが、住民は地域愛に満ちていた。2027年には、国体を長野県で開催したいとの情報も聞こえてくる。今回は、限られた予算での大会運営。だが「スケ」と「知恵」の展開で、低迷する地域に活気の展開もできたはずだ。地域住民の応援は少なかつたとの残念な声が聞こえてきたことも事実。情報がバラバラで、応援の興味が薄れたとの声を関係者はど



歓喜を熟く、タイムを短く、可能な国体が、各県応援団が、ゲレンデを駆け回り、山を駆け上り、木々を揺らす

う感じたのだろうか。だがオリンピックなど国際大会の競技運営に携わったメンバーや大会を中心的に運営した役員スタッフの活躍は頼もしい限りだった。これらの能力を継

（NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上）

継続させるためにも、国際大会の開催が必要だと、改めて考えさせられた。国体開催でもあった。